

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。2 ▽は、本文の追跡・分析。  
3 ▼は、読解に関する技法。4 ☆は、記述に関する技法。

■前提

『現代文キーワード』で知識を押さえよ。「言語」参照。

■追跡

① ひとはたがいにとばを交わしあいながら、相互に生の関心をわかちあい、共同的な生をいとなんでいる。ことばは人間存在の共生的な生の地平を刻み、ひとがともに在る存在の次元を紡ぎあげ、またそのうちに編みこまれてゆく。

▽傍線部どうし、二重傍線部どうしが対応している。お互いに関心を持ち合う場、いつしよに生きていく場、それらを作り出すのはことば。さらに、ことばは、このような人間どうしの場の中に「編みこまれる」。ことばは、ことばが交わされる場の中で、位置を占め、息づく。

② ことばを話し、なにもものかに語りかけるといふ行為が、特定ないし不特定の話し手と聞き手との(あいだ)で生起するできごとであるならば、語られることばは、語り手と聞き手のあいだに成立する一定の(関係)を前提するとともに、関係のかたちを変容し、あらたなかたちをつくりだす。親密なあいだで親しげなことばがとりかわされ、疎ましげなことばの背後には疎遠な(あいだ)が透けてみえている。私のひとごとが他者との関係を修復し、あいだがらを決定的に破壊させる。そうしたケースにおいて問題となるのは、多くのばあい、なにが語られたかではなく、どのように語られたかであり、あるいは、なにが口にされたということそのものである。

▽何らかの関係(回路)があつてことばが行き交う。ことばが行き交うことによつて、関係のありようが影響を受け、変化する。クラスメイトという関係があつて、「おはよう」「おはよう」という。明るい「おはよう」に明るい「おはよう」が返つてくることによつて、親しさが、より、増す。「おはよう」が無視されたとき、亀裂が生まれる。

③ 言語は◆問1その意味で、人間のあいだのコミュニケーションのたんなる手段あるいは道具ではない。ことばは、むしろ、それ自体がひとびとのあいだの交流の(かたち)である。日常的にはありふれたものでありながら、言語理論的には周辺の現象ともされるたぐいの言語使用のうちに、ことばを交わすことの意味が、かえつて純粹なかたちであらわれているかもしれない。ことばが、私と他者との関係それ自体のかたちでもあるならば、ことばを(語ること)そのものの経験が問われなければならないだろう。

▽▼「たんなるくではない。むしろ」。漢文にもあるように、「むしろ」は選択形。「むしろ」が出てきたら、チェック。むしろの後が、大事なこと。

「かたち」がキーワードになっている。「かたち」とは見えるもの。②の「どのように語られたか」が、その見えるもの。どんな言い方でもいいから、たんなる手段なんだから、意味が伝われば

いいんだ、というのは、違う。雑な字でも、無愛想な声でも、意味さえ伝わればいいじゃん。でも、そのとき、関係、は微妙なものになっていくんじゃないかな？

◆問1「その意味」とは？

もちろん、直前の「そうしたケースにおいて問題となるのは、多くのばあい、なにが語られたかではなく、どのように語られたかであり、あるいは、なにが口にされたということそのものである」ということ、を指すので、後は、「そうしたケース」の内容を的確に補えばよい。それは、その前にある「ことばが、…関係のかたちを変容し、あらたなかたちをつくりだす」という場合。これらを整理。

(解答例)「ことばが人間関係を形作るという場合、何が語られたかではなく、どのように語られたかが問題になるということ。」

④ 言語をめぐる考察の伝統のなかでは、言語はおおむね記号の一種であるとかんがえられてきた。けれども、日常的なことばのやりとりのなかで、「ことばは記号である」という主張は、おそらくはやや異様な発言ともなるだろう。「言語はたんなる記号にすぎない」と語られるとき、ことばのふつうの話し手が感じるであろう、そこはかたない違和感のうちに、言語経験のある重要な側面がかくされているようにおもわれる。言語理論の内部でその違和感もはや感じとられないものとなつているとすれば、言語にかんする特定の描像が——ことばをたんなる道具ととらえる見かたとも密かにつうじるかたちで——言語をめぐる理論の脈絡をすでに一定でいど支配するにいたっているからである。

▽対立しているのは何？「言語経験」／「言語理論」。「日常的なことばのやりとり」／「ことばは記号」。生きていく血の通うものと抽象的な理論。「言語理論」の中では、ことば||一定の意味を表す記号、という見方が支配していて、「そうかなあ、たんに意味だけを伝える道具なのかなあ」という違和感が打ち消されてしまつていく。

「記号」については、『現キ』でもう一度確認しておこう。何かを意味するものはすべて記号と考えることによつて、記号論という分野が生まれた。ここでは服装や建物も記号と考える。そうすることによつて、今まで見えなかった「意味」が見えるようになった。

⑤ いわゆる音声言語における語の次元でかんがえらるるならば、(それ自体としては空気の疎密波である)物理的な音声を言語音として構成するものは、音声のみずからとの(ことなり)、やや正確なかたちで言いなせば、他の諸音声パターンとの(ことなり)に媒介された、特定の音声の自己差異化である。語は、その意味ではたしかに、示差の体系の内部で成立する記号にほかならない。——ことばの通常の話し手にとっては、言語音が「たんなる物理的音声である」ということそのものが、◆問2かえつてひとつの発見である。母語の使用者にとっては、意味が染みとおつた音声こそが所身なのであつて、「無意味な」物理的音声が生えられているのではない。言語記号といたった表現も、ふつうの話し手にとって無条件に成立する言いまわしではない。その表現は、日常的なことばのやりとりから、なにほどか身をひいた理論的なかまを前提している。問題は、言語にたいする反省的視点によつて主題化されることがが、言語経験の総体を覆いかくす方向で機能して、そのなりたちを見あやまらせる場面があるのでないか、ということである。

▽筆者の問題意識が、はつきり形をなしてくる。やや抽象的なので、具体的に後追ひしよう。『現キ』『言語』の概説や「差異」の項も読もう。

ある物理的な音が、言語として発せられる、また聞こえる、ということは、その音が、他の音声パターンとは異なったものとして、区別できるように発せられたということだ。「ハイ」といいたとき、それは「ハア」とか「ホイ」とは区別された音として発音される。語は、示差の体系の内部で成立する、というのは、「ハアーハイーハエー……」と延々続く、他とは違う音声パターンの中の一つとして、語は特定の意味を持つということだ。言語音も元を正せば「たんなる物理的音声」であり、ただ、それらは、他の音声パターンとは異なる体系の中で意味を帯びる、という考え方は（これはソシユールの発見だが）、言語から「人間」という複雑な要素を切り離して、言語を純粹に理論的に捉えることに役立った。

しかし、ふつうの話し手にとって、肉声は、缶の転がる音などは全く違う、意味が染みとおった（声）として受け取られている。「語は、示差の体系の内部で成立する記号だ」といった考え方も、理屈としてお勉強しなければ（ちよつと立ち止まって反省してみなければ）、しぜんに湧いてくるものではない。

筆者が知りたいのは、理論が勝ちすぎるために、言語についての経験が見えなくなったり、間違っただとえ方をしてしまうのではないか、ということである。

◆問2 「かえってひとつの発見」といえるのはなぜ？

今までそうは思っていなかったから、だよな。じゃ、どう思ってたのかな？ ☆傍線部を延長し、この文と次の文を並べれば、答えは書ける。

①ことばの通常の話し手にとっては、言語音が「たんなる物理的音声である」ということ（理論的な考え方）は、ひとつの発見だ。

②母語の使用者にとつては、意味が染みとおった音声こそが所与（実感されていること）であつて、「無意味な」物理的音声として実感しているのではない。

（解答例）「ことばの通常の話し手にとっては、ことばは意味が染みとおった音声として実感されているおり、言語音はたんなる物理的音声だというようには考えたことがないから。」

正確に書くなら、

①通常（常識的実感）—— ことばは意味をもつ音声（意味が染みとおった音声）

②理論 —— ことばは差異の体系の中で意味を示す物理的音声（たんなる物理的音声）

という違いだ。①では、ことばの裏には自動的に意味が張りついている感じだが（実定的に意味を含む）、②では、「ハイ」は「ハエ」ではない、という形で意味が決定する（欠性的に意味が決まる）と考える。②がソシユールの言語学だが、もはや、言語を考えるときの「常識」となっている。「差異の体系の中で意味を示す」という点も本文からも読み取れるので、答案に入れることも可能。

⑥ いまかりに、「記号signum」とは「じぶんとはことなるもの」を代理する「あるもの」である (aliquid stat pro aliquo)、としよう。たとえば、立ちのぼる煙は火が存在する「記号」であり、茜色にそまる西の空は翌日の晴天の「記号」である。煙が火の記号であると主張される次元は、「煙」と「火」とをいわば等分に見くらべる視点を前提している。◆問3 それとおなじようなしかたで、ことばと、ことば以外のものを見くらべて、「言語は（なにもものかの）記号である」と語りだすことが可能であろうか。

▽問3を考えよう。「それ」とは何か？ 例を抽象化する作業だ。あるもので、あることを表現する。煙は、火が燃えていることを表す。煙（記号）は、火が燃えていること（意味）を表す。この

ときの前提は、煙（記号）は火が燃えていること（意味）と等分に見比べる視点があること。

◆問3 「それとおなじようなしかた」とは？

（解答例）「記号とそれによって表現される意味を等分に見比べる視点に立つて、あるもの（記号）で、あること（意味）を（代理として）表現するしかた。」

「煙」と「火」とをいわば等分に見くらべる、ということとは、同時に、「煙」と「火」とを分離して見くらべることもできるものとして見ているということの意味する。一般に記号は、赤信号は止まれ、という例でいうなら、信号は、「ストップ」という文字信号でもかまわないし、赤い灯りが緊急事態を示してもいいというように、それぞれが「代理」なのだから、分離可能、組み合わせ自由である。

さて、では言語はどうなのか？

⑦ とりあえず、経験に与えられるがままの言語にそくするならば、**ことばは記号ではない**。むしろたとえばガグマーがそう語っているように、ひとが経験しているがままのことばが、そのものとしてつねにすでに意味である。そのいみでは、【読解問題1】言語を記号ととらえる立場は、言語経験の基底的な次元をあらかじめ跳びこえてしまっている。（ことば）とは、ここではさしあたり、なほどこか抽象化された体系ではなく、そのつどの言語活動そのものである、ひとの具体的経験をさすこととすると、**（意味）は（ことば）のうちにある**。他者から発せられるのは、たんなる音列であるのではなく、他者が語ることはそのものが、すでに意味である。一見きわめてトリヴィアルにもひびくことだからであるけれども、ひとがそれを生き、経験しているがままのことばに定位してかんがえられるかぎり、「言語は記号である」という語りかたが、言語経験の基礎的なたちを覆いかくすものであることを、まず確認しておかなければならない。——問題は、そのさきにある。言語をたんなる記号とみなす発想が、そこから生まれてくる現場がつきとめられ、そのありようがとらえかえされなければならないとおもわれる。

▽筆者の考えがはつきりした。

（前提）経験に立て。

（結論）ことばは記号ではなく、（意味）は（ことば）のうちにある。

（理由）それが実感だから。

（問い）言語をたんなる記号とみなす発想は、どのように生まれてしまうのか？

⑧ ひとつの例から出発してみよう。いま、あるものなまえをおもいだそうと努力しているとす。その（もの）の色、かたちを私ははつきりとおもいえがくことができる。そのわずかな匂い、すべらかな手ざわりも、それが他の（もの）とふれあうときに発する微かな音すらもおもいおすことができる。なまえだけがどうしてもおもい浮かばず、私はある種の「いごこちの悪さ」をおぼえている。

▽あるよね。「あれなんやっただけ？」ものとか、概念とか、人の名前とか。歳取ると増えるな。テストのときに多い？ それは勉強不足。

⑨ このばあい、（もの）にかかわる記憶のすべては、たしかにのこされていて、なまえの記憶だ



けが失われているのであろうか。ほどなく、そのものなまえをおもいだしたとしても、その（もの）のすがたかたち、手ざわり、音、おしなべて五感にかかわる情報になにもつけくわわることがない。なまえは、（もの）のありよう自体とは無縁であるかにみえる。にもかかわらず、なまえが呼びもどされることで、（もの）の占めるべき位置が確定されたように感じられ、「いごこちの悪さ」は消失してゆく。

▽名が与えられることによって、「いごこちの悪さ」が消える。たしかに。

⑩ ことばをさらに見さだめるために、べつの例をかんがえあわせてみよう。ことばが表現するとされることばはひとごとおりのではない。ここでは思考の場合をかんがえてみよう。いま、なにごとか表現すべきもの・ごとがあり、それにことばを与えたいとおもっている。なにごとかを語りだしたいとかんがえている、とする。私はなかなか適当な表現を見つけない。なにごとかを語りだしたい。——もどかしさは、◆問4ある隔たりの感覚である。この「もどかしさ」が、ことばと、それが表現すべきものがべつべつに存在し、言語が思考の「記号」であること（証拠）であるようにみえる。そうなのだろうか。

▽言語／もの。言語／思考。いずれにせよ、それらが、べつべつに分離して存在していると考えるとき、言語は記号っぽいものとなる。筆者は「そうなのだろうか」と疑問を投げる。そうではないのか？——別々ではない、と続くことが予想される。さて？

◆問4「ある隔たりの感覚」とは？

「もどかしさ」の中身をいえばよいので、直前をまとめればオッケー。

「いま、なにごとか表現すべきごとがあり、それにことばを与えたいとおもっているが、なかなか適当な表現を見つけない。もどかしさをおぼえる。」

これを、もすこし、シャープに刈り込んで。

（答案例）「表現すべきごとに対して、なかなか確かな表現を見つけない。表現すべきごとと表現が一致せず離れている感覚。」

⑪ やがて私は適切な表現を見だし、「これだ！」とおもう。そのばあい、ことばが見つかる以前に、表現されるべき思考は、ことばによって表現されるにいたった思考と「おなじ」思考として、すでに存在していたのだろうか。そうではあるまい。ことばはここで、すでにある思考にたちを与えたのではなく、思考のたちそのものをつくりだしたのである。さがしあぐねていたのはたんなる記号ではない。——このような場面で「ことばは思考の記号である」と語ることに、怒りのゆえに振りあげられた拳が、怒りという感情の記号であると主張すること似かよった、奇妙に遠まわりの印象がある。後者のケースでいうならば、ふりあげられた拳は怒りの記号ではなく、怒りそのものの一部である。怒りという感情と、拳をふりあげるといふふるまいが同時になりたっているように、ことばとそれが表現する思考とが同時に成立している。【読解問題2】ことばを語るこのうちには思考がある。ことば以前に、ことばとはべつに、ことばと等分に見くらべられる思考そのものがあるわけではない。そのつどことばのうちには生きてくるものが、ことばと、それが表現するものを横ならびで見くらべるとかかんがえることは◆問5一箇の理論的な幻想である。言語を記号としてとらえることは、言語経験それ自体の基礎的な次元を飛びこえてしまっているのである。

▽【読解問題1】になっている「言語経験それ自体の基礎的な次元を飛びこえてしまっている」についての詳しい説明がここにある。

二種類の例がある。一つは、「表現は思考の形そのもの」。もう一つは、「拳は怒りそのもの」。拳の例は言語のものではない。しかし、ことばと思考の同時性のイメージを捉えてもらうために示されている。

今、あなたも「答案」を考えているわけだが、「書かないけど、わかっている」ということはありえない。書いた瞬間に、口にした瞬間に、その表現された程度の理解が初めてそこに実現する。理解が理解だけで成立することはない。理解は、何らかの表出と同時に起きる。これって、「受験勉強的」にも大事なこと。

◆問5「一箇の理論的な幻想」といえるのはなぜ？

☆傍線部延長、と、☆なぜ↓どのように、で見通しをつけよう。

「ことばと、それが表現するものを横ならびで見くらべるとかかんがえることは一箇の理論的な幻想である」とは、どういうことか。そう、☆問いを立て直す。ここまでの読み取りを利用して、いいかえていく。

「ことばと、それが表現するものを、分離し、等分のものとして見くらべるとかかんがえることは、言語理論を組み立てる前提として想定することはできるが、現実の言語経験の中では決してそのような視点に立つことはできない」ということ。

文末を変えるだけで、答案になるはずだ。

（答案例）「ことばとそれが意味するものを、分離し、等分に見比べる視点に立つことは、理論的に想定できるだけで、現実の言語経験の中では決してそのような視点に立つことはできないから。」

⑫ もしも記号が、煙が火を告知するように、じぶんとはべつものを呈示する現象と理解されるなら、「ことばparole」とは思考の「記号signe」ではない。ことばと思考が、そのように相互に外的な関係においてとらえられるのは、ただ、両者がべつべつに主題化される場合にあることである。ことばと思考とはたがいにつつみあっており、**ことばと意味とは不可分**である。——そう書きしるしたのは、『知覚の現象学』のメルローボンティであった。

▽「両者がべつべつに主題化される」というのは、「煙」と「火」は、それぞれ独立した現象であるということだ。それがあるとき、たまたま関係づけられる。でも、ことばと意味、ことばと思考はそうではない。独立してはいない。分離できない。

⑬ 心理学的には、「意味飽和」の実験や、いわゆる「ストループ課題」の実験がしめしているように、母語のそのつどの使用者にとっては、言語はけっして勝手に恣意的な記号の体系としては与えられていない。母語を生きるものにとっては、比喩的にいえば、ことばの響きが（もの）そのものの響きと交響している。発生論的な観点からしても、ここではわけても語は、いわば、もの・ごとに貼られてゆく、できあいのレットレルのようなものではありえない。原初的には、ことばの響きと、（もの）の相貌とが溶けあって与えられている。表現 (Ausdruck) としてのことばは表情 (Ausdruck) を、あるいは（響き）をもつ。その響きは、始原的な場面では（もの）の相貌であり、ことばとものがひびきあう響きであるとおもわれる。（もの）とことばとは離ればなれに存在し、事後的に関係をとりむすぶのではない。ことばのなかで（もの）が立ちあらわれ、ものが立ちあら

われる知覚の場にはことばが刻みこまれている。メルローポンティが、遺稿のなかで語っている文  
 言に仮託するならば、【読解問題3】ことばは、かくて「ものや波や木々の声」となる。

▽「恣意的な記号の体系」の「恣意的な」というのは、記号と意味のむすびつきは、たまたまであ  
 って、じつは何でもいい、ということの意味している。外国語や人工的な概念については、そうい  
 う面もあるだろう。しかし母語では違う。

「ことばの響きと、(もの)の相貌とが溶けあう」といったことについて、具体的なイメージを  
 例示しておこう。赤ちやんが、ことばを覚える。はじめは単純な唇や舌の動きしかできないだろう。

「マンマ」のような音を発する。そのとき「ママ」は、「そうよ、ママよ」というかもしれない。  
 食べ物了指したとき、「まんまがほしいの?」と返すかもしれない。「マンマ」というような音の響  
 きは、赤ん坊が自分の生命を預ける存在の相貌とある意味必然的に結びつく。

進化の途上で初めて、人間が音声器官を通じて、ものや心に対して発声したとき、その音はやは  
 り「相貌と溶けあった」ものだったのではないか。「ああ」「おお」「うん」といった感動詞はその  
 相貌を色濃く残している。(初めは恐らく叫びと音楽と言語は区別がなかっただろう)

筆者は、ソシユル的な言語理論を批判し、ことばと意味とは不可分という経験の次元を見るこ  
 とを主張している。誤解のないように言っておくが、これによって、ソシユル的な言語理論が否  
 定されたわけではない。議論の次元が異なるのである。

たとえていうなら、理論的には、太陽の周りを地球が回っている、しかし、それを見渡す視点に、  
 地球上にいる人間は立つことができない、というようなものだ。それは「お勉強」することによっ  
 て仮設される想像上の視点である。しかし現実にはわれわれは、動く太陽を経験し、その経験の中  
 で生きている。

言語は差異の体系だ、記号と意味の結びつきは恣意的だ、という観点は、人間の色々な営みの謎  
 を説明することに役立つ。また、それはものの見方を相対化する力を持った。しかし、そのため  
 には理論から、「人間」や「心」というファクターを捨象しなければならなかった。

日本の国語学者時枝誠記は、「言語過程説」を唱え、ソシユルを批判した。

「言語は、思想の表現であり、また理解である。すなわち言語は、「表現行為」を媒介する「表  
 現過程」であり、「理解行為」を媒介する「理解過程」そのものである。したがって言語は、人間  
 の行為・活動・生活の一つである。」

どう? 今回の議論に似ているでしょうか? ここには「人間」が条件として入っている。このよ  
 うな見方は、実際に理解や表現のための言語、人間の行為・活動・生活高めるために言語を訓練し  
 ようというときに役立つ。二つの見方には、それぞれの価値がある。

■読解問題

①なぜ「言語を記号ととらえる立場は、言語経験の基底的な次元をあらかじめ跳びこえてしまっ  
 ている」のか。

☆なぜ↓どのように、☆切り身の方法、で行こう。

「言語を記号ととらえる立場は、／言語経験の基底的な次元を／あらかじめ跳びこえてしまっ  
 ている」ということ。

・言語を記号ととらえる立場＝記号とそれによって表現される意味を分離し、等分に見比べる視点  
 に立って、記号は意味を代理して表現していると考ええる立場。

・言語経験の基底的な次元＝ことばを音声として受け取ると同時に意味がことばとは不可分なもの

として経験されている実態。

ドッキングして、文末を「〜から。」に。

【解答例】「記号とそれによって表現される意味を分離し、等分に見比べる視点に立って、記号は  
 意味を代理して表現していると考ええる立場は、実際には、ことばを音声として受け取ると同時に意  
 味がことばとは不可分なものとして経験されているということは無視してしまっているから。」

②「ことばを語るのうちに思考がある」とはどのようなことか。

同じ段落内から、「ことば」「思考」を含む部分を取り出して、整理する。そのまま抜き出した  
 できないから、キーワードを含むところを材料にして組み立てる。この技に習熟してほしい。

・ことばが見つかると同時に、表現されるべき思考は、ことばによって表現されるにいたった思考と  
 「おなじ」思考として、すでに存在していたのだろうか。そうではあるまい。ことばはここで、す  
 である思考に私たちを与えたのではなく、思考の私たちそのものをつくりだしたのである。

・ことばとそれが表現する思考とが同時に成立している。

← ことばはすでにある思考に私たちを与えたのではなく、思考の私たちそのものをつくりだした。

・ことばとそれが表現する思考とが同時に成立している。

← ことばはすでにある思考に私たちを与えたのではなく、ことばが表現されると同時に思考のた  
 ちそのものをつくりだされる。

【解答例】「ことばはすでにある思考に私たちを与えるのではなく、ことばが表現されるそのとき、  
 同時に思考のかたちそのものをつくりだされるということ。」

③「ことばは、かくて「ものや波や木々の声」となる」に見られる言語観をまとめなさい。

直前をきちんと整理しよう。ふんいきでなんとなく書くこと失敗する。本文を根拠・材料にして整  
 理すること。

・(もの)とことばとは離ればなれに存在し、事後的に関係を取りむすぶのではない。・ことばのな  
 かで(もの)が立ちあらわれる。

・ものが立ちあらわれる知覚の場にはことばが刻みこまれている。

← ことばは、かくて「ものや波や木々の声」となる。  
 ことばが人間の声ではなく、もの声だといわれている点に注意。

①ものとは分離していない。

②ことばの中にもものが現れている。  
 (そこからさらに一歩踏み込んで)

③ものの中にもことばが現れている。  
 この三点を含めばよい。

【解答例】「ものとはことばは、離ればなれに存在し、後から関係づけられるのではなく、ことばの  
 中にもものが立ちあらわれ、さらに、ものが立ちあらわれる知覚の場にことばが感じ取れるほど、溶  
 け合うようにつながっているという言語観。」